

里山の問題（その１）

大串龍一

河北潟湖沼研究所

〒920-0051 石川県金沢市二口町八58

要約：近年，日本の自然環境に関する論議の重要なテーマとなってきた「里山」について，それがどのようなものであり，なぜわが国においてとくに問題とされるのかをいろいろな観点から検討する．まずその成立から歴史の変遷にかんして，現代までの見方をとりまとめた．

キーワード：「里山」のイメージ，小学唱歌，人為的自然，成立年代，「里山」の崩壊

ここ10年来，日本の自然あるいは社会科学の分野において，「里山」という言葉が良く聞かれるようになってきた．特に環境問題のなかで「里山の保全」が大きく言われるようになった．2005年に開催された愛知万博の準備段階から，予定地に含まれる「海上の森」（かいしよの森）の保全をめぐって，当初の計画を大きく変更しなくてはならなかったことが，話題となったためと思われる．しかしその背景には，1990年頃から里山というものが日本の自然環境の保全に大きな関係をもっているということが，環境保全関係者や生態研究者の間で自覚されるようになってきたことが，このような動きの基盤にあると考えられる．

「里山」というものが自然環境保全運動のなかで大きく取り上げられるなかで，これまでの自然環境の見方にかなり違った傾向がみられるようになってきた．それは，第一にはそれまでの人手の入らない原生自然の保全を重視する立場から，人間活動との関係の深いいわば人間によって変容された自然をも重視する方向へと，視野が広がったことであり，第二には自然環境を保全するためには，人間が介入しないで自然にまかせるという方向から，ある種の自然を保全するためには，適切に計画された方法で人間が介入することが必要であるという方向に変わったことである．

しかし「里山」というものに対する概念や定義あるいはそれを保全する方法論は，近頃になって実態の把握と検討が始まったばかりであり，社会でも学界でも「里山」に対する認識自体がまだ固

まっていない．ここでは「里山」について今までに判ってきた範囲で，ほぼ確かであるといういわば「里山」の常識とでもいうべきことをまとめて記述し，それをもとにして「里山」問題に関する，私の意見を述べたい．この文章のなかでは，まだ十分に判っていないことについてもかなり思い切った断定をしている部分もあるが，もちろんこれは今後の調査研究や多くの人たちの論議を通じて変わってゆく可能性を多く含んでいる．

1. 「里山」がなぜ話題となってきたのか

ここ十数年，日本における環境問題の議論のなかで，それまでのブナ林や屋久杉などの原生林に代わって，「里山」という言葉が頻繁に聞かれるようになってきた．いろんな環境保全の議論を聞いていると，里山の保全ということが自然環境保全の中心課題と感ぜられるような流れになってきている．このことは環境教育における「ビオトープ」という言葉の流行と平行して起こってきているように思われる．「里山」にしろ「ビオトープ」にしろ，これまでの環境問題のなかでの「生態系」とか「生物多様性」とかいった議論がややもすれば観念的になって，具体的なイメージを伴わないのに対して，観念よりもむしろ具体的なイメージあるいは風景が先行していて，概念あるいは定義がまだ充分にはまとまっていないことが特徴といってもよい．

「里山」という言葉は，「奥山」に対応する言葉